

---

# Happy dreamへダイブ!

kuroriko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Happy dreamへダイブ！

### 【Nコード】

N1043T

### 【作者名】

kuroriko

### 【あらすじ】

VRMMORPGの中から出られなくなった三人が作り出す、ファンタジーストーリー！  
二人共、美少女なんだけど……戦闘狂なの！？俺、二人に殺されるかも……。  
ところで……死んだらどうなの？ まあクリアしたら出られるんだし……

王道！？だから良い！！モンスターとの戦闘有り！恋愛要素有り

有りです！

ゆとりだけでも書いてみる！！

## 1 ログイン（前書き）

序盤の説明はいらん！って感じた方は少し飛ばしちゃってください。  
ゲームの中に入ったんだな。と認識さえして頂ければあまり支障は  
ないかと……。。

中盤からはリズム重視な感じになっております。

良くあるゲームの中に閉じ込められたストーリー！？ だからこそ  
良いんです！ 適当に何話か見てくださると嬉しい限りです。

## 1 ログイン

2045年この頃にはもう、VRMMORPGは世界的に有名になっていった。

VRMMORPGとは率直に言うと、専用のヘッドギアを着けると、オンラインゲームの中に入って、自分の体のようにキャラクターを動かしてプレイすることが出来るゲームというやつです。世間ではオンラインゲームの中に入る事をダイブや、潜ると言う。この頃にはあつて当然、潜れないとゲームじゃないという者まで多く現れた。

長い長い冬が明け、春となった。春が来たのと同時に高校三年生なんて人生で一番なりたくない肩書きを持った事を憂鬱に思いながら、今日は始業式だけだった学校の帰り道を歩いている。

「どんなゲームなんだろうな」と一人呟いた。

今日は新しくサービスを開始した。VRMMORPG「ハッピードリームオンライン」日本語に直すと幸せな夢……なんともメルヘンチックな名前のゲームだ。と最初は思ったのだがネットの期待度は高くサービスを開始するのを心待ちにしている人達が多くいる。そんなゲームが今日解禁となるのだ。ゲーム大好きな俺がそこまで話題に上がったゲームをやらない手はない。

家に着き扉を開け、靴を脱ぎ捨て階段を駆け上り、自室へ駆け込んだ。

パソコンを起動させてる間に、ジャージに着替えた。

パソコンが起動し終わるとすぐにハッピードリームオンラインの公式HPにアクセスし、ゲームのダウンロードを開始した。10分

ほどでダウンロードが終わった。その後、プレイヤー名、職業を選ぶ事になった。名前は「リク」本名の『白川陸』から取った名だ。職業は「ナイト」を選択した。そしていよいよ待ちに待った、ゲームがプレイできる。興奮したまますぐに、VRMMORPG専用のヘッドギアを着け新しくできたアイコンをダブルクリックした。ヘッドギアから起動音が聞こえ、視界が真っ暗になった。

視界が戻るとそこには、森の中だった。ああ、美しい木々……あれ？ 街とかじゃないんだ？ 等を思っていると後ろから声をかけられた。

「その初心者君、ここはどこか分かる？ MPCとか居ないんだけど」

振り向くとそこには、腰のあたりまであるキレイな赤い長い髪が印象的で、身長は160cm前後、スラっとしていて……胸も大きくはないが小さくもないといった感じ。目は二重で、可愛いというよりは美人という言葉が似合うだろう。VRMMORPGのゲームの中では、キャラクターの顔は現実の顔に近いものになる。もちろん性別も現実と変わらない。だが髪の色、瞳の色はランダムに決められる。

「それを初心者に聞いてどうすんの？ と尋ねて問題ないの？」

「はは、そうだよね。ごめんごめん。冗談だよ。忘れて」

「はあ……それよりここ何処なんだ？ 君も初心者でしょ？ って今日からサービス開始なんだから当たり前か」

「うん、そうだね私も初心者。……そういえば君の名前は？」

「俺の名前はリク。一応何かの縁ってことでよろしく」

「あ、ごめんごめん。名乗るの遅れたね。私の名前はツバキ。よろしくね」

「つても本当にここどこだ？ 今日がサービス開始だつてのに人もいない」

周りを見渡して見ると、小さな小屋が数個見かけるだけで他には何も無い。

その時、俺の目の前で白いエフェクトが輝いた。人が新たにログインしてきたらしい。

「お、誰か新しくきたぞ」

「そうみたいね」

白いエフェクトが止むと、キレイな青い髪のショートカット、幼い顔立ち。身長は150前後だろう。中学生くらいか？ という印象を持った。……胸が……。うん……。二重なのだがこちらは幼い顔立ちのせいかな美人というよりは可愛いという印象だ。

「……森？」

「えーと、こんにちわ」

「……………」

一歩下がった。

「なんで一歩後ずさるの！？ おゝい？」

「リク君が近いから怖がつてるんだよ。分かってないなあゝ、ほら、あなた名前はなんていうの？」

「……………」

二歩下がった。

「えっと、ツバキさん？ 俺よりも下がられた気がするけど気のせいだよ」

「……………」

ツバキはぶるぶると無言で震えている。寒いのだろう。もう春だけれど……。

「君、名前なんていうの？」

改めて聞きなおした。すると彼女はじっと目を見つめて、小さな

口を開いた。

「……リコ」

「リコさんか、あ……遅れた。俺の名前は、リク」

すると震えが止まったらしいツバキが自己紹介をした。

「私はツバキよろしくね」

「……よろしく」

一通り自己紹介が終わると、その様子を見てたかのように……。

美しい森の中にあつた一つの小屋が吹き飛んだ。前振りもなく吹き飛んだ。……え？ 急すぎやしないかって？ いやだって吹き飛んだんだもん！ 仕方ないじゃないか！

「うおっ！？」

「きゃっ！？」

リコは体をびくつと震わせたのが分かった。

自分の身長よりもでかい斧を持った、小さなゴブリンの姿をしたMPC？が近づいてきた。

「お前達はこのゲームから出ることはできない。出たいならこのゲームをクリアするしかない」

と言うと踵を返し帰っていきこうとする。

「待て待て待て！ 説明不足過ぎ！ このゲームこんな設定なの！？」

「たしかに説明不足過ぎよ！」

ゴブリンは消えてしまった。

「……何このクソゲー展開についていけないんだけど」

「私、今日限りでこのゲーム引退するね。私じゃちょっとついていけないや……。リク君、リコちゃん短い間だったけどありがとね」

「……うん、ばいばい、ツバキ」

「ああ、俺も引退することにするよ……じゃあツバキさん、リコさん」

そして、ツバキはウィンドを出し、ログアウトするのだと思っ  
ていた、すると。

「あれ、ログアウトできない!? なんて? ……反応がありません!?」

それを聞き急いでウィンドを開く。

「っ!? ログアウトできないのか? ……できない……」

リコが困惑した顔で俺の目を見つめてくる。

「まさかゲームの中に閉じ込められた?」

「えーと? 私、ちよつと混乱してきたんだけどどうすれば良いん  
だろ」

「……今思っただけだし、あのゴブリンあの小さなで小屋ふっ飛  
ばしてたけど、どんなパロメーターしてんだらうな」

「それ、今必要な情報なの?」

「良く考えると必要なかつたかな……」

「……眠くなってきた」

「リコさん、この状況分かってます?」

「……ゲームの中に閉じ込められた?」

「い、いえす、分かってるのに冷静なんだね。パネエってやつです  
ねリコさん」

「……おやすみ」

「リコちゃん!? ……早っ! もう寝ちゃった。どうすれば良いの  
よこれから」

「……ツバキさん、ここ安置っぽいしさ。俺もここで一回昼寝をし  
ようかと思うんだけど、一緒にどう?」

「な、何言ってるの!? リク君、ゲームの中とはいえ男女一緒に  
寝るなんて!」

「へ、変な意味では! いや多少変な事考えたけども! とにかく  
一回頭の整理がしたいから俺は昼寝するな」

「はあ……分かったよ。おやすみなさい。私も一回横になるっかな」

そして三人は木々が生い茂る、集落の真ん中でお昼寝をすることにした。現実逃避って結構大事。

## 1 ログイン（後書き）

二話目からは戦闘開始ですので、ギリギリ読めるな……と感じて頂ければぜひとも二話目も読んでくださると嬉しい限りです。

最後に、ここまで読んでくださってありがとうございます！

## 2 バトルスタート

VRMMORPGでは、食事、トイレといった行為は必要がない。ただ、睡眠だけは必要である。VRMMORPGを製作していた段階では睡眠の必要を無くす事を予定していた。だが、実用化された時にどうしても睡眠の欲求だけは取り除けなかったのである。

「夢ってことはなかったな」

目を覚まし、ぐるりと周囲を見渡した。まだ、ツバキとリコは隣で昼寝中だった。

どれくらい寝ていたのだろう、と思いウインドを開き左下の時計を見た。

「三時を回ったところか」

今日は学校が午前中だけだったのでログインしてからまだ三時間ほどしか経っていない。

「ん、おはよ。リク君」

「ツバキさん、おはよ」

「やっぱり夢じゃなかったか？これってやっぱりバグなのかな？」

「バグだと信じたいけど、運営からの連絡も入ってきてないってことはもしかしたら本当に閉じ込められたのかも知れない」

「信じれない話だよ……それにしても今日がサービス開始だっというのに三人しかログインしてないってどうゆうことなんだろ」

「分からない。ただ、ここに居ても埒が明かない、ツバキさん、リコさんが起きたらこここの外へ出てみようと思うんだけど一緒に付いてきてくれないか？」

「うん、付いていくよ」

ありがとうと返事をする、リコが体を起こした。

「お、リコさん丁度よかった」

「リコちゃん、おはよ」

「っふぁ……おはよう、二人共」

リコはまだ眠たそうに欠伸をした。

「リコさん少し周辺を探索してみたいんだけど、付いてきてくれる？」

「うん、分かった」

リコは短い返事をする。腰のホルダーから初期装備の小さい拳銃を二丁取り出した。武器の確認をしたかったのだろう。

「あ、リコさんガンナーなんだ。そういえば職業とか聞かなかったな。……俺はナイト改めてよろしく」

そして俺も初期装備の細くて短めの片手剣を背中の鞘から出した。「私はビショップだよ」

そういうとツバキも初期装備の木でできた杖を腰から取り出した。「中々バランスが良さそうなパーティーだな。よし、外に出てみよう」

パーティー要請を二人に出し、ついでにフレンド登録もしておいた。

そして集落の外へ歩いていく。

外へ出るとすぐに、赤い毛をした豚らしきモンスターが出てきた。モンスターを凝視するとモンスターの下にモンスター名とHPバーが表示された。モンスター名『レッドピッグ』

「俺が前で斬るから、二人は後衛を頼む」

二人は頷き、戦闘態勢に入った。VRMMORPGでは大抵どのゲームでも戦闘はさほど変わらないので慣れた手つきで三人は配置についた。

「っはー！！」

上段からの攻撃が敵の頭に入った。HPバーが三分の一ほど減った。バンツと発砲した音が響いた。

ドンツ！ ドンツ！ ドンツ！ 俺のHPバーが減少した。もちろんレッドピッグからの攻撃ではない。

「痛っ痛っ！ ストップ！ ストップ！ リコさん攻撃止める！」  
振り向いてリコにそう言った直後、レッドピッグからの突進を食らった。早くもHPバーが残り半分を切った。

リコはキョトンとした顔で発砲するのを止めた。ツバキが隣で苦笑していた。

即座に振り向き戦闘を再開した。

「はっ！！！！」

溜め斬りスキル『パワーラッシュ』を使いレッドピッグを倒した。するとMPバーがわずかに減少した。

戦闘が終わり、振り向いて言った。

「ちよつとタイム、一回集落に戻ろう」

「……なんで？」

「あはは」

リコは分かっているらしい、自分が誰を攻撃していたかを……  
ツバキは苦笑していた。

集落に戻るとすぐに俺は不満を口に出した。

「リコさん、攻撃当たってないっての！！」

キョトンとした顔で言った。

「当たってた」

「ああ、俺にね！ 何？ 俺に当ててたの！？」

「うん」

「なんでだよ！！」

「邪魔だった」

俺はうな垂れた。パーティープレイじゃない、こんなの……。

「まさか三人でやってHP半分も削られるとは思わなかったよ。……」

「いやほとんど一対二だったけど」

そういえば、ツバキは何してたんだ？ と思いツバキに聞いてみた。

「そういえばツバキさんは一体なにを？」

「スキルってどうやって使うのかな？ って思ってスキルウィンド

見てたの」

「……まさか二人ともVRMMORPG初心者？」

二人揃って頷いた。そうか、今の戦闘では二人に後衛をお願いして、俺が突っ込んでいったからあの二人は一步も動いていなかったのか。慣れた手つきで戦闘態勢に入ったな。と思っただのは勘違い……。

その後二人にスキルの使い方を教えた。ナイト、ウォーリアーなどの前衛職の場合スキルは決められたモーションをすると出る。溜め斬りのパワーラッシュなら剣を腰のあたりまで引くとスキルエフェクトが発生する。ビッシュョップ、ウィザード、ガンナーなどの後衛職の場合、決められた詠唱を唱えることでスキルが発生する。上位スキルになっていくにつれて詠唱が長くなる。レベルが規定レベルに達すると新たにスキルが増える。

リコにはガンナーの立ち位置も教えた。ガンナーは斜めから攻撃を入れるのが基本である。

ツバキの回復スキル『キュア』をしてもらいHPを回復させ、その後二匹のレッドピッグを狩り終わるとレベルアップを知らせるエフェクトに包まれた。

「色々あったけど、やっと1レベル上がったな」

「……リクがうるさいから」

「あのまま続けてたら俺のHP無くなって死んじゃうんだよ！」

「まあまあ、リク君。リコちゃんはまだ気にしてないよ？」

「俺が気にしてんだよ！」

駄目だ……俺このままでは突っ込み疲れて死ぬ。ん……そういえば。

「このゲームってHP無くなって死んだらどーなんだろ」

「……………」

二人が黙り込んだ……。お願いだからなんか答えて！俺、特にリコさんとかリコさんとかリコさんにHP真っ黒にされそうなんだから！

## 2 バトルスタート（後書き）

二話までしか書いていないのですが……学校がテスト週間に入りますので明日から投稿はかなり遅れるかと思えます。

最後になりましたがここまで読んでくださった方本当にありがとうございます！

### 3 レベルアップ

「……あのさ、何か答えてくれると俺の精神状況が大きく安らぐんだけど」

「分かった」

そう言うとリコは拳銃取り出し、俺に向け……発砲した。

ドンっドンっと体に弾が当たる。その威力で体が自然と後方へ後ずさる。

「ごふっ、ツバキ、ごふっ、さん早く、ごふっ、とめて！」

言い終える前にツバキさんがリコの拳銃を横から奪い取った。

少しの間沈黙が続いた。俺のHPバーは残り三分の一ほどになっていた。

「リコさん、なんで俺打ったの？」

「死んでみたいって言ったから」

「言ってるねえんだよ！ そんなこと！ 死んだらどうなるかもわからないのに殺そうとすんな！」

「ツンデレ？」

「ちげえよ！ ツンツンしてる訳じゃないんだよ！」

「まあまあ、そんなに怒らないで」

ツバキが苦笑しながら俺をなだめてくる。

「リコちゃん約束しよっか、この三人は仲間だから銃を仲間に向けて打つのは禁止ね？」

「うん、分かった」

リコはそう言い頷いた。

「私、ツバキ、レッドピッグは仲間」

「レッドピッグは人じゃねえ！ お前しかも普通に打ってただろ！」

「大事な仲間」

「リコさん本当お願いします。僕を仲間に入れてあげてください。

俺もうなんか涙出てきそうっす……」

「ん、仕方ない」

俺はありがとうございます。と頭を下げ割と本気で喜びを表した。

その後狩りを再開し、レッドピッグや亜種系のブルーピッグ等を狩り続け、狩りを再開してから一時間ほどでレベル10に達した。スキルも増え、少しだけこのゲームが楽しくなってきたところだ。こここのマップの敵では経験地が入らなくなってきたので、提案してみた。

「二人共、次のマップに進んでみないか？」

「うん、進んでみたい！」

「うん」

二人共進んで行く意思を見せた、この頃から三人は早くもログアウトできない現状を受け止め、ゲームクリアを目指すようになっていた。クリアしようと思った気持ちは半分はやけくそ、もう半分は純粋にゲームが楽しいからだろう。

次のマップに進むと、こここのマップも見渡す限り木々しか見えなような森の中だった。ここは森のダンジョンだろうと三人は簡単に予想できた。

ここでも新しいモンスターを順調に狩りしていた。

「結構慣れてきたな。奥進むとボスとかいんのかな？」

「たぶんね。でも少し怖いかな……もし死んじゃったらどうなるんだろって考えると」

「ああ……でもどっちにしても何もしてないよりは少しでもゲームクリア目指した方が気持ち的にも、前に進んでるって思えて楽だよな」

「うん、そうだね。それに私少し楽しくなっちゃってきたし！」

俺とツバキシヤベつていると、リコが不意に会話に入ってきた。いや、ぶった切ってきた。

「……二人って恋人？」

「へ？」

「え？」

俺とツバキが二人して声を出した。

「仲良さそうだから」

「いや違う、違うよ！ 今日さっきこのゲームであったばかりだよ！」

そこまで否定されると少しだけ悲しくなる。うん、少しだけ……。

「あ、ああ！ リコがログインしてくる三分前に知り合ったんだから恋人なわけないだろ！」

そう言つとリコは興味を失ったように黙り込んだ。と思つたら言葉が発した。

「ボス倒しにいきたい」

「リコさんつてもしかして見えない誰かと会話してたりすんの？ 会話の流れ無視つすか！？」

「もうすこしだけレベル上がってからにしない？ リコちゃん」

「うん、分かった」

俺だけ会話の流れについていけないんだけど、俺が変なの？ 会話の流れつてこんな唐突に変わるもんなの？

そして黙々と三人はモンスターを狩り続けた。

モンスターを倒して手に入れた防具、武器を装備しているので初期装備とは比べものにならないくらい防御力や攻撃力が上がっていた。

レベル20を超える時にはもう午後8時を過ぎていた。

「少し疲れたな、ボス戦は明日のほうがいいかもな」

「そうだね、私もちよつと疲れちゃった。新しいスキルも色々を試したいし明日にしようか、リコちゃん」

「分かった」

リコは短い返事をし、マップの入り口の安置に座り込む。それに従い、俺とツバキも座り込んだ。

「ん〜どうしよっか、この後」

「そうだな、今日はもう暗いしこの安置で睡眠をとろうか」

安置には最初から立ててあった小さなテントや集落にもあった小屋が一つ置いてあった。

「お風呂は？」

リコが俺の目を見つめ聞いてきた。

「えっと、……周りにそれらしき物はないな。我慢するしかないみたいだ。でも汗とかにおいはしないんだし、別に気にしなくていいじゃないか？」

「はあ〜リク君は分かってないな〜女の子は皆お風呂が好きなんだよ」

「へ〜……某しずかちゃんみたいな理論なんだな」

そう言つとツバキは、ふんつと言つて顔をリコの方へ向けてしまった。

「リコちゃんつて若いそうに見えるけど、中学生？」

ゲーム内で年齢を聞くのは失礼にあたる。とされてきたが、最近のゲームでは現実の顔とほとんど違わないためこつやつて年齢を聞く事にもあまり失礼な行為として見られなくなった。女性に年齢を聞くのはどちらにしても失礼にあたる行為なのだが。……ツバキはVRMMORPG初心者なのでどちらにしても聞いていたと思うけど……。

「高校一年生」

「え！ 高校生？ 可愛いから中学生くらいだと思つてた」

可愛いからと言つのはどんな理由なんだろう。小さいと言つてしまえば良いものを……。

「そついつ、ツバキさんは俺と同じくらい？」

「私高校三年生だよ！ リク君は？」

「俺も高校三年」





### 3 レベルアップ（後書き）

はい、投稿してしまいました……悪い事ではもちろんないのですが、やはり勉強しなきゃです……。

ここまで読んでくださった方本当にありがとうございます！お気に入り登録されました方……本当にありがとうございます！元気が出てきます！

## 4 ワールドマップ

ツバキに蹴りだされ、どこで寝ようかと悩んでいた時。小さな小屋が目に入った。

あそこで睡眠をとろうと決め小屋へと向かっていった。小屋は使っている木材が新しいらしく真新しかった。中に入ってみると8畳くらいの広さがあり、家具は一切なかったが……

「ん？……まさかこの人がいたのか……？」

床には、どこで手に入るか分からない、ドリンクらしき飲料や、お菓子らしき食料のゴミが床に散乱していた。VRMMORPGではお腹は空かないが、そしてお腹も膨れないが味覚は伝わるので、昔プレイしていたゲームでもボス戦後の打ち上げの時などはこういった物を飲んだり食べたりしていた。

ゴミが散乱しているところに一つ、巻物らしき物が混ざっていた。拾い上げて見ると巻物は自然と紐がほどけ中身が見えた。

「……？ これはこのゲームの全体マップか？ だとしたら……」

その巻物を見て俺はその後の言葉が続かなかった。なぜなら……その全体マップらしきものはとてつもなく広いからだ。森、海、草原、砂漠、火山、雪山、洞窟、神殿、地下、ダンジョンらしきもの入り口が十個ほど、それに浮遊都市らしきものまで描いてあった。それに、所々に街らしきものも見られた。

「こ、こんなのクリアすのにどれだけの時間かかるんだよ……！」

俺は搾り出した声で自嘲気味に言い放った。今すぐに、ツバキ達に知らせよう。と思ったのだが体がいうことをきかない。体が睡眠を要求していた。俺は脳で思っても体がいうことをきいてくれず、倒れるようにして床で睡眠を開始した。

翌朝、俺はツバキに起こされるまで寝ていた。

「リク君、早く起きて！ ん……この巻物何!？」

薄っすら目を開けるとツバキが巻物の中身を見ていた。リコはツバキの隣でお菓子の袋を見つめていた。……朝起きて俺がいないと分かりこの小屋にやってきたのだらう。そしたら俺が寝ていた……と。

「んん……おはよ二人共」

目を開け挨拶をすると同時に二人の視線は俺に向けられた。

『これ何?』

二人の声は綺麗にハモった。だが、間違いなく聞いている質問の内容は全く異なるものだらう。

「俺はどちらから説明すれば良いんだ？」

『最初から』

これも見事にハモった。この質問に至ってはたぶん、聞いている質問の内容は同じでそのうえ、一つ前の二人の異なる質問も綺麗に解決に導けるだらう。

そう思い、俺は昨夜の事を思い出しながら語っていった。人がここに居たのではないか？巻物はたぶんゲームの全体マップだらう、という俺の予想を一つずつ語っていった。

「まあ、そんなとこだ」

「ってことはこの巻物はリク君が言うようにこのゲームの全体マップってこと？」

ああ、たぶん……と曖昧な返事をした。するとツバキは満面の笑みを浮かべて言った。

「え！ って事はワクワクしそうな所がこんなにいっぱいあるってこと!？」

……あれ俺と反応違うかい？

「最初、現実に戻れないのは少し辛いと思ってたけど、今はどちらかと言うと楽しくなってきたかも!」

「私も」

リコもお菓子の袋を手から離しツバキの意見に肯定した。……ゲムってハマると本当に危ないっていうけど今この状況の事を言うんだろうな。と俺は思ったのでした。っと。

「はあ……なんか完全に吹っ切れた！俺もどうせならこのクソゲーをクリアしてやる！」

「その意気だあ……！」

とツバキは朝から少々高めのテンションで壊れていた。するとリコが声を発した。

「リク、アレ見て」

リコはお菓子の袋を指差した。

「ん？」

「食べたい」

「うん、でももう入ってないだろ？」

袋の中を見てみると油でテカテカしていた。パッケージを見るにたぶん、ポテトチップス的なものが入っていたのだろう。そしてもちろん、中身は空っぽだった。

「……うん」

俯きながら言葉を発した。俺はその姿を見てどうにかしてやりたいたいと思ってしまった。

「それじゃ、早くここから出ないと、巻物には街らしきものも何箇所があったしそこに売ってるだろう」

ツバキは「そうだね！」と嬉しそうに笑顔を浮かべていた。リコはそう言うつと顔を上げ俺とツバキの腕を掴んだ。

「リク、ツバキ早く行こう」

「うん、早く行こう！」

「待て待て二人共！こっから抜けるにはたぶん、ボスを倒さなければいけない！」

そう言いながら巻物を見せた。森のエリアを見てみると集落から進んだ四つ目のマップにドクロのマークが記されていた。

「それに、あと一つマップを進まないといけないから……急げるだけ急ぐけど、確実にモンスターを倒していく」

二人はこくんと頷いた。

その後、三人は体慣らしを兼ねて今までのマップで少しだけ狩りをした。

「そろそろ次のマップ行くか」

「うん！行こう行こう」

「うん」

二人共、とても嬉しそうに声をあげた。

そして、隣のマップへ移動した。

見渡して見ると、森のエリアにふさわしく木々が生い茂っていた。だが、今までと違うのは、そこは曲がり角がなく広い一直線な道になっていた。

「なんか、緊張するな。この道」

「う、うん。ボス一步手前って感じが伝わってくるよ」

リコは無表情のまま前だけを見つめていた。

「さて、ボス退治といきますか！」

その言葉で二人はさっきまでのテンションに戻った。

「はあ〜！ ちょっとワクワクしてきたかも！」

「早くボス倒してお菓子食べたい」

安置から出て少し歩くと、足音を聞きつけたのか二匹のピッグ系

……グリーンピッグが茂みから現れた。

「お、ピッグ系の亜種まだいるんだな。街を出てもまだ森のエリアが続くみたいだってけどまだピッグ系のモンスターいんのかな」

「そんな事より早く倒そうよ！ ほら、リコちゃんもう拳銃構えてるよ〜」

はあ、と俺は大きなため息をついて、ピッグを倒しまくって手に入れた少し大きめの片手剣を鞘から出したのであった。

#### 4 ワールドマップ（後書き）

本当はピッグを倒してこの話を終わらせようとしていたのですがなんとなく最終話っぽい感じに終わらせてみました（笑 意味はないです……。

最後になりましたがここまで読んでくださった方本当にありがとうございます！

## 5 テスト

マップの終わりを告げる赤いラインが目の前に浮かび上がっている。

「このラインを渡ると、やっとボス戦だな」

「やっとって言っても一日しか経ってないよ。長く感じたよね」

「うん」

リコが小さく頷いた。

「二人共聞いてくれ。今から作戦を伝える」

二人はこちらに顔を向けた。俺は話しを続ける。

俺は作戦を伝えた。

回復ポーションがピグを倒して手に入れた物しかないの、俺が前に出て敵と一対一にもっていく。ツバキは『キュア』で常に回復、余裕があるなら『フォース』で攻撃力アップなど補助魔法をかけてくれとお願いした。リコには、しっかりと間合いを取り敵にターゲットにされないように動きながら、攻撃してくれと頼んだ。正直不安だったが、見たこともないボスなのでこれくらいが精一杯の作戦だ。

「頭でもう一回イメージしてくれ。終わったら行こう」

二人は目を閉じ、真剣な顔でイメージしている。俺の心臓は今にも破裂しそうなくらい緊張していた。……いや、びびっていた。これまでゲームをしていてここまで緊張した事はなかっただろう。死んだらどうなる？ 現実に戻る？ もし……戻れなかったら……本当に死ぬのか？ この二人はどう思っているんだろうか……分かるわけないか。少なくとも今は楽しんでいるように見える。俺も演技でもなんでも構わないとかく死なないように努力する事しかできない。この二人だけは男として守る。と心に決めた。

「よ、よし私はもう大丈夫！」

「……うん。私も」

二人とも明らかに緊張した面持ちで言った。

「よし行こう」

赤いラインを超えた。

視界に光が戻るとそこは、今までと変わらない木々が生い茂っている森。いや違つとすればここは道になつていては無く、広場みたいになつていて。集落にあつた小さな小屋がいくつも見渡せる。

「ここにボスがいるの……？」

「たぶん、いると思う」

そう言い、一歩踏み出す。そうすると一度見た光景が広がつた。

「……小屋が吹き飛んだ。」

「っ！」

『キャッ！』

小屋があつた所に視線を向けると、自分の身長よりもでかい斧を持ったを小さいゴブリンがいた。

「はは、お前がボスか。どつから出てくんだよ。そのパワー」

乾いた笑いを混ぜ、皮肉めいた言葉を吐いた。するとゴブリンが口を開いた。

「お前達はここで死ぬ」

「言つてくれるな。小つこいの。お前を倒したら、解放してくれるのか？」

「私を倒すことができたなら、正式にお前達はゲームプレイヤーとして認められる」

疑問が浮かびあがつた。二人も疑問を口にしようと思つたのだから。小さく息を飲んだ音がした。だが質問などする暇を与えるつもりはないというように、小さな手で持っていた自分の身長よりもでかい斧を投げてきた。

「うおっ！」

俺はそれを避けた。二人はすぐにポジションに着いた。

俺は瞬間移動系のスキル『ファーストフット』をゴブリンの目の前まで接近した。すかさずコンボスキル『ファーストソード』で切りかかった。

ゴブリンの小さな体にヒットしたHPバーが、微かに減った。

ゴブリンは攻撃を受けるとどこから出てきたのか斧を振り下ろしてきた。

「っ！！」

HPバーが大幅に減少した。一度距離を取りツバキに回復させてもらう。

「どっから斧出てきてんだよ……それよりも一撃が痛いな」

リコの攻撃も当たってはいるがほとんどダメージがない。このゲームではガンナーは敵に近いほど威力が上がるので、リクの後ろでターゲットにならないようにと、と言われていた距離では実力が発揮できていい。だが、死んだらどうなるか分からないゲーム……前に出すわけにもいかない。

「っは！！」

俺は考えを吹っ切るように、飛び斬りのスキル『ダイブラッシュ』を放った。

ゴブリンは避けもせずを受け、攻撃直後の俺に向かってスキルを使った。

それは『パワーラッシュ』にそっくりなスキルだった。それをモロに受け、HPが一気に半分以上削られた。俺は危険を感じ、後ろの転がりこんだ。すぐにゴブリンは距離を詰めてきた。……やばい！死ぬ！

……その時、ゴブリンが振り下ろそうとしていた斧に銃弾があたり斧がポリゴン片となって消えていった。

銃弾が飛んできた方向を見てみるとリコが斧を狙い、銃スキル『

エイム』で100%銃弾が当たるように狙いをつけ斧を狙って発砲したのだった。すぐさま俺は立ち上がり距離を取る。

「あの斧は一撃で壊れるのか……ってか、リコさんスゲー!!!」

「私の攻撃じゃHPが減らせないから『エイム』でなるべく斧を狙う」

リコは淡々と言った。……もしかして怒ってる？前に出たいのか……？この戦闘が終わったら聞いてみよう。と胸に決め前を見据えた。

ゴブリンのHPはやっと三割ほど減っていた。ゴブリンの何も持っていない手からエフェクトが出て斧を作り出していった。

「あれじゃいくら斧を壊したところであんまり効果なさそうだな。」

『エイム』で狙うのもかなり限定したところでしか無理だろうし」

『エイム』には狙いを定めるための時間が少々いるため、限定されたところ例えば、敵が麻痺している時、疲れている時などが挙げられる。さつきみたいに斧を振り下ろそうとしていた時に『エイム』をして狙うことはかなり難しいだろう。リコはそれをマグレでやったのか狙ってやったのかは分からないがかなり難易度の高い技である。

ダメージは与えては食らいダメージを与えては食らいの繰り返しで、ゴブリンHPは残り二割ほどになっていた。

「MP回復ポーションが無くなった……まずいな」

「私もあと一回くらいしか『キュア』できないよ」

「ねえ」

俺とツバキはリコの方向に耳だけを傾けた。

「あのゴブリンの攻撃力、最初の時と比べて上がってる」  
リコは続けた。

「でも防御力は落ちてる」

「は？」

「へ？」

俺とツバキは二人にしてぽかんとしてしまった。

## 5 テスト（後書き）

今日テストがあったのですが……インフルエンザにかかってしまい、学校休んでしまいました。……てな訳でまた少しだけ更新できなくなっちゃいそうです。泣

最後になりましたが、ここまで読んでくださった方本当にありがとうございます！

## 6 ゲームマスター

「たぶん三人で一斉攻撃したら勝てる」

リコはそう言い、前を見つめた。

俺は考えた。残り少ないMPでそんな賭けをしていいものか……だが考えても考えても残り少ないMPではこれが一番可能性があると思った。でも……リコは何を根拠にそんな事を言っているんだ？ 考えても 分からない。

「分かった。それで決めよう」

ツバキも頷いた。これで最後の攻撃にすると決めた。リコは今までよりもずつと前に出ていた。弓攻撃スキル『シューティングアロー』を打つのだろう。ツバキも後ろで口パクで攻撃スキル『ライトニン』グ』の呪文を唱えていた。

ゴブリンは新しく出てきた斧を持ち、一步前に踏み出してきた。俺は『ファーストフット』でゴブリンの前に立った。それを予測していたのかゴブリンは『パワーラッシュ』を放ってきた。俺はそれを避けれずに腹に受けた。

「つく……」

「リク君……」

「リク！」

二人が名前を呼んだ。どうしたんだ？ と思いHPバーを見てみると……点滅していた。もう一割ほどしか残っていない。俺はとてつもなく焦った。頭の中が真っ白になった。それでも叫んだ。

「構うな……！ 攻撃しろ……！」

ゴブリンは止めとばかりに、斧を振り下ろしてきた。俺は頭が真っ白の状態で防衛反応だけが働き、その攻撃を受け止めようと、剣を構えた……すると、まばゆいエフェクトが出た。……速攻剣スキル『一閃』

自分の頭では理解できない速度で自分の剣がゴブリンの斧に命中した。……斧はポリゴン片となって消えた。

ツバキ、リコはそのチャンスに二人は一斉にスキルを放った。目の前で派手なエフェクトとエフェクト音が交錯する。俺はそれでも何が起きたか分からずに呆然としていた。……ただ斧が消えた時、ゴブリンが不敵な笑みを浮かべていたような気がした。

長かった戦いはこうして終わりを告げた。

目の前でゴブリンが、ポリゴン片となって消えていった。それでも俺は立ち上がれず、座り込んだままゴブリンがいた方向をずっと見ていた。

「リク君……良かった。本当に良かった」

「リク……ごめん」

ツバキは泣いていた。リコは自分が提案した作戦のせいだと思っているのだろう。俺は、笑いながら言葉を発した。

「ツバキさん死んだって本当に死ぬかは分からないって、それとリコさん、あの作戦じゃなきゃどっちにしろ勝てなかった。本当良い作戦だったぞ」

リコは何も言わず、ツバキは泣きながら本当に良かったと言い続けていた。

その後MPが自然回復してきたのでツバキに『キユア』をしてもらいHPがバーの半分ほどに戻った。

「よし、これで安心できるな。……よし！ 次は街だ！」

「うん、街だね！ リコちゃん、いっぱいお菓子買おうね〜！」

「パーティーする」

「ああ、それいいボスも倒したし、パーティーとやるか！」

ピッグを倒すとkr（お金）が出てきたので多少金銭面余裕があった。……ゴ布林倒してもいっぱい出てきたし、お菓子くらいなら大丈夫だろ……？

二人は頷き立ち上がった。

その時……またしても見計らったように、黒いエフェクトが目の前で輝いた。

「っ！」

三人は空気を吸い込み、武器を構えエフェクトから現れた……マントを羽織っているのを見た目しか分からないが、身長が高く体格の良さそうな黒マントを見据えた。

「お前は誰だ！」

「……私が誰だなんて事は気にしないでください。……それよりもおめでとうございます。テストに合格です。あなた達三人にはこのゲームをプレイする権利を授与します」

声は低く、表情はフードに隠れて分からないがとても冷たく言い放つ。

「何言ってるのよ！ 意味が分からない。普通にプレイしてたじゃない。ここから出してよ！」

「……あなた達は今までならまだ死ねたんですよ。……ですが、ここからは死んだら現実には戻れません。試してもらっても結構で

すが……時は巻き戻せませんよ……？」

コイツはふざけてやがる。人の心を弄んでやがる。……誰がそんな事言われて、死ぬる……？少なくとも俺は死ねない。

バンツ！バンツ！と乾いた音がした。リコが黒マントに目掛け発砲していた。

……当たっている当たっているがHPバーが全然動かない。

「……お嬢ちゃん達のレベルでは私を倒すことはまだ無理です。そして……あなた達は私の攻撃で今なら一撃で死ねます」

冷たく言い放った。……コイツやばい！

「リコさん、ストップ！」

「……分かった」

「……良い判断です。……これで私からは以上です。……質問などありますか？あ、一つだけですよ」

質問がないわけがなかった。だが、一つだけだと……コイツ本当にふざけてやがる。

ツバキとリコに視線を送ると二人は首を縦に振ってくれた。俺が質問をしても良いということだろう。二人にも質問したい事は山ほどあるはずだ。……身体は大丈夫なのか……何の目的があって閉じ込めるのか……まだまだたくさん聞きたいことがあるだろう。だが、俺に質問権をくれた。俺は決めた。これからの目標になると信じて質問をした。

「それじゃ、一つ……このゲームからはちゃんと生きて帰るできるのか？」

「……信じてくれてないみたいですね。……はい、あなた達がこのゲームをクリアすることができれば無事に現実に戻れますよ」

「クリアってどうしたらクリアになるんだよ！」

「……質問は一つだけと言ったんですけど……まあこれも一つの質問のうちとしましょう。……簡単ですよ、あなた達がこの世界のラスボスを倒せばゲームクリアです」

黒マントはとてつまらなそうに言った。そしてその答えもかな

リシンプル……だが、それは言葉で言うには簡単だが、命が掛かっている可能性があるとなると全然難易度が違う。

「ふ、ふざけんなっ！」

「……あーもう説明は終わりです。……それではまた会いましょう。それだけ言い残すとすぐに目の前から消えた。

「っ！ くそ！ アイツ何なんだよ……！」

俺は自分の唇を強く噛んだ。

「……あはは、どうしようもないね。リク君、とにかく街に行こう？」

ツバキは笑いながら声をかけてくれた。心の中ではとても不安だろう。だが顔に出さずに声をかけてくれている……。

「なんであの黒マントの人は分かっている事を言ったの？」

リコが意味の分からない質問をした。……いや意味なら分かった。……この二人はもしかしたら最初の時点でこの事を認めた上でゲームを本気で楽しんでいたのかもしれない……はは、こいつ等バカだろ！ 本当……どうしようもないな。だが、二人といると俺まで楽しくなってくる。……ゲームもクリアできるんじゃないか、と思えてくるから不思議だよ。まったく……。

「考えたって仕方ないって！ そうだな街に行こう！」

二人の手を取りマップの外へ向かって行った。

## 6 ゲームマスター（後書き）

バトルシーンは苦手です……。もっと上手に描けるように練習していきたいと思います。次回はテンポの良い会話を多く混ぜられたらな。と思っております。

ここまで読んでくださった方もありがとうございました!!

## 7 タウン

目に光が戻るとそこは、木々が生い茂った、街というよりは町というほうが正しい広場が見えた。ただ、今までのマップと比べて明らかに広いという印象を持った。いくつものショップが立ち並び、そして何よりも広い。と印象を持たせる大きな要素があった。……人が大勢いるのだ。ショップで買い物をしている者、ベンチに座り談笑している者。

「ひ、人がいっぱいいる〜！」

隣にいたツバキが嬉しそうに言葉を発する。

「あ、ああ、そうだな。やっぱり人がいたのか」

「……うるさい」

「……さすがリコさんっすね。ここにきてもそのテンションとは軽く誇れますよ」

軽口にそういうとリコは頭を軽く捻り、キョトンとした顔で聞いてきた。

「いちろー並に？」

「なんで日本野球界の宝とあんたが同類として考えられるんだよ！しかも本気で考えるな！」

あと設定年代の事を突っ込もうとしたがやめておいた。どうせ「設定って何？」って聞かれるのがオチだ。

「二人漫才はいいからさ！とにかくお店見て回らない!？」

ツバキの目が輝いているように見える。年頃の女の子いくらゲームの中とはいえ、ショップングとなると見て回りたくなるのだろう。人がいるってこういう安心感が生まれたからなのか、さっきまでとは違い心の底から楽しそうに見える。

「うん、リクも行く」

リコが俺の手を引っ張る。……男なら分かるよね。この状況の嬉しさ。自然とニヤけてしまう。

「り、リク君顔がいやらしいよ！」

「し、失敬な！ 常に公然わいせつ罪に問われるような顔って！ ひどすぎるだろ！」

「リク……私の記憶力が正しければツバキはそんなに長い台詞を言っていない」

つく……リコに初めて突っ込まれた……。ああ！ 俺なりに頑張ったボケだよ！ そして突っ込むならもっと分かり易く突っ込んでくれ！

そんなこんなで町中を見て回った。

ショップには種類があり、MPCがポジションなど消耗品を売るショップ。武器や防具を売るショップ。そしてこのゲームをプレイしているプレイヤーが広げるショップ。結構な数のショップがあった。プレイヤーが広げるショップにはモンスターから出た、特殊な武器や素材が買えるようだった。

お金がどの程度あれば良いのかが分からないので、いけるところまではモンスターを倒して装備を手に入れようと三人は約束をした。このゲームではパーティーを組んでいる者同士が倒したモンスターによって出たアイテムやお金などはパーティー専用のウィンドに入られてしまう。

俺達はMPCが売っている。HP・MPポジションをある程度買いい、パーティー用のウィンドに入れた。これで好きな時に各自が個数を選び持ち出す事ができる。

目的のお菓子もたくさん買った。小屋に落ちていたのと同じポテトチップスらしき物にチョコレートらしき物など買った。

「リク君！ 見て見て！ これどんなモンスターの素材なんだろう！？」

ツバキは終始テンションが高かった。プレイヤーが広げているショップを見てテンションを上げている。ちなみに、俺はその紫色の

皮の素材を見て逆にテンションが低くなったわけだが……。

「リク、フライパン売ってる」

ツバキとは違うシヨップを見ていたリコが声をかけてきた。

「フライパンなんてあるんだな」

このゲームでは自分の家を買うことや、部屋を借りる事ができるのでたぶん自宅で使うのだろう。

「買って」

「なんでだよ！」

「買って」

「まさかの無視ですか……」

「買って」

「買いません」

「いいから買って」

「かーいーまーせーん！」

「……なんで？」

「家もないので今は使えないのです。おっけー？」

「……リクは昔から無理を可能にする男だって知ってる」

「あんたは俺の昔を知ってるのか！　そして、使うところが無ければフライパンは武器にしかありません！」

その後もリコはブツブツと文句を言っていたが無視をしてツバキに声をかけ、飲み物を買い、ベンチで休憩をすることにした。

「このジュース美味しいよ、リコちゃん！」

ちなみに俺は『レッドドラゴン』という名の赤いラベルが貼られたジュースを買い、ツバキは青のラベルが貼られた『スカツと！　しようぜ！』という名の「もう名前じゃねえよ！」と突っ込んでしまったジュースを買った、リコは七色のラベルの『虹の味がするジュース』という名のジュースを買った。俺はもう一切突っ込まなかった。……ここの運営本当にふざけてやがる。

そして、ツバキはリコに青ラベルのジュースを差し出した。女の

子ってなんだか良いよね！ 男でやるとこれが気持ち悪いのなんのって！

「ツバキ、これも美味しかった」

「そう言いリコも七色のジュースを差し出す。」

「お互い手に取って飲んでいる。……ん？ 俺だけなんか輪に入れてたくない？ 仲間なんだからここは俺にも輪に入る権利くらいあるはずだ。」

「俺のも美味しかったぞ、ツバキさんそのツバキさんの唇が付いたジュースと交換しようぜ」

「んあつ！？」

ツバキが変な声を出した。そのコンマ数秒後、俺の視界から光が消え去られた。

「ぐぼっはっ！」

俺はもう意味の分からない声を出して後ろに吹き飛んだ。顔面に強烈な右ストレートが入った。もちろんツバキから放たれた拳だった。

「私のならあげたのに」

リコは何か言ったような気がしたが頭に声は届かなかった。

少し時間が経って俺がベンチに座りなおすとツバキは、ふん。とそっぽを向いてしまった。気まずいので気になった事をリコに聞いてみることにした。

「リコさんさ、ゴブリン戦の時なんで攻撃力上がってるとか分かったの？」

リコは飲んでいたジュースから口を離ししゃべり始めた。

「斧を破壊すると攻撃力が上がっていったのが分かった」

「そうだったのか……」

全く気が付かなかった。斧を狙っていたリコだからこそ分かるのか？ とも思ったが、斧だけに集中しているので逆に気が付くのはかなり難しいことだろう。

「あ、そつだ聞こつと思つてたんだけどさ……リコさんもしかして前に行きたかつたりする？」

ガンナーは後衛職なのだが、近距離で打つほど威力が上がるので上手いプレイヤーなら前衛にいることだつてありえる。

「リクが危なそうなら、私前に入る」

「あ、う、うん。分かつた」

なんだが、男として少し泣きたくなつた。女の子に助けられるつて……さつき前に出たいと見えたのは俺が攻撃を受けて危なかつたからだろう。

「リク君、手に入れた盾は装備しないの？」

機嫌が少しだけ直つたよつなツバキが疑問を口に出す。

「あ、ああ、装備するとスキル何個か使えなくなるから……これからは危ないと思つた時だけ装備することにするよ」

その旨を二人に伝えると二人は納得したよつな顔をした。

「よゝし、それじゃ、パーティーしよー！！」

「よし、そつと決まれば戻るぞ！」

「へ？ リク君戻るつて？ ここの町の民宿に泊まるんじゃないの？」

「あ！ 俺も一緒な部屋でよければもちろん無理をしても部屋借ります！」

「……よし、戻ろつかー！ リコちゃん行こつ」

ツバキはリコの手を取り二人で歩いて行つてしまつ。……気のせいじゃなければ、これつてラブコメなんじゃないの！？



## 7 タウン（後書き）

やはり、会話を書いている時が一番の楽しいです。笑

ここまで読んでくださりどうもありがとうございます！笑

## 8 ラブコメ!?

三人だけのパーティーをして楽しんだ後、夜も深まってきたので就寝することにした。……もちろん俺は小屋の中だったけども……パーティーはとても盛り上がり楽しかった。どこかで語る機会があれば語ろうと思う。

朝目が覚めると、一番に今日は何をしよう? という不安な疑問ではなく、してみたい事や知りたい事がたくさんあるといったものだった。

小屋から出て外の空気を吸いに行くと、ツバキ、リコの二人はもう起きてて何やら話しこんでいる。

「ツバキ、このフライパンの事どう言ったら良い?」

「ん〜……リク君なら許してくれるんじゃないかな」

リコは首を横に振りながら

「昨日、買ったたら駄目だつて何回も言われた」

どうやらリコは昨日、駄目だ。と言ったフライパンを買ったらしい。……いつの間にか使えないって言ったよね!?

「おはよ」

「っー」

リコが身体をビクッと震わせる。

「おはよ〜リク君」

ツバキは苦情気味に挨拶を返した。

「り、リク」

「はあ〜……いつの間にか買ったんだか……」

「……」

「反省しているようだし、ツバキさんから罰を差し上げてやってください」

ツバキは、え？ 私！？ と戸惑いながらも良い罰を与えた。

「それじゃー！ おやつを一回分だけなしにします！」

「うん、分かった」

リコは俺の目を見つめた。

「リク分かった？ ツバキがリクの分一回分なしだつて」

「俺のじゃねえーよ！！ あんたのだよ！」

リコはきよとんとした顔でツバキの方に顔を向けた。

「そうなの？」

ツバキは、あははと苦笑いを浮かべ

「残念ながらそーなのです」

リコはうーうーと唸りながらも反論が出ないのか言葉は発するこ  
とがなかった。

そんなやりとりも終え、三人で今日はどうする？ などと閉じ込  
められたという危機感が全くない三人の会議が行われた。

「レベル上げるよりも先に昨日の町へ行って。情報収集したいと思  
います！」

「却下」

リコは座り込んで、地面の草を窺いながら即答の答えを出した。

「早っ！ てか少しは考えてくれ！」

「プレイヤーと戦うのなら問題はない」

恐ろしい。リコは戦争でもしたいのだろうか。

「何？ 戦争でもしたいの！？」

「それも面白いかも」

リコは良い事言ったな。お前！ みたいな顔でこちらの目を上目  
遣いに見てきた。……可愛いけど、なんか違う！

「無理だ！ 俺にはこの本気のボケは耐えられない！ ツバキさん  
何とか言っつけてやってくれ！」

俺は無理だと判断して、ツバキに助け舟を出す。

ツバキは腕を組み目を瞑り考えているような表情をしていた。

「ん〜……そうだね。リコちゃん。今日は町で情報収集にした方が  
良いかも」

「……ツバキがそう言うなら仕方ない」

リコは、渋々と言った顔でツバキが言ったことに肯定した。……  
なんで俺の言う事は聞いてくんないの！？ そのような顔をリコに  
向けるとリコはツバキに耳打ちをして、なぜか俺はツバキに「リク  
君、サイテー……」と本気で引かれたような発言をされた。……も  
うなんか色々と悲しい。

町に着くと三人は一度見た光景にも関わらず少しだけ感動してい  
た。……いや一人を除いてかも。

「やっぱ人がいるとなんだか安心するな」

「そうだね〜」

リコは会話に参加する気がないのか辺りをキョロキョロと見回し  
ている。すると何か見つけたのか、プレイヤーが開いているショッ  
プに近づいていこうとする。

「あ、リコちゃん！ おやつ抜きだよ〜」

「み、見てくるだけ」

リコは小走りに行ってしまった。

リコは情報収集には興味ないみたいだったので二人で情報収集を  
することにした。

多く立ち並んでいるプレイヤーショップの一角のショップの身体  
つきのよく体格が良い、赤い長髪をした男プレイヤーに話しかけた。  
「こんにちわ。あの聞きたいことがあるんですけど」

「んー？ 何？ どうしたの？」

そこで、気になったことをいくつか質問をした。と言ってもこの  
男ももちろん最近始めたなので分からないことも多かった。

三人のパーティー編成でログインした場所に三人だけがログイン

されてくる。その三人でパーティーを組み最初のボスを倒す。これは共通したルールみたいだった。この人たちは俺達よりも先に来てあのゴブリンを倒したらしい。昨日、砂漠から来たプレイヤーがいてあちこちでこのテストは行われている。という情報もある。

俺は最後の質問でこう聞いた。

「それとなぜあなたは、こんな状況なのに平気そうなんですか？」

「ん？ 君も同じじゃないかな？ だってちよつとは楽しいでしょ？」

俺は間抜けな顔をしていただろう。男は子供みたいな顔で笑いながら言った。楽しいでしょ？ と。

「そうですね。楽しいです」

俺も笑いながら答えた。……そうだ、これはゲームなんだ楽しんでほぅがやっぱり良いに決まってる。死ぬかもしれない。だからどうした？ どうせ人は死ぬ。少しくらい死ぬ時が早まったって一緒じゃないか！ こっちのほうが100倍俺らしい死に方だろうしな！ 男も嬉しそうな顔をしていた。お互いに健闘を祈りそこを立ち去った。

「あの人良い事言うね」

「ああ、相当なゲーム好きだよ。ありゃ」

「そういうリク君も相当なゲーム好きなんですよ？」

ツバキはいたずらっぽく、首を傾げて聞いてきた。……それ反則だろ……。

「あ、ああ、大好きかな。ツバキさんだって人の事言えないけど！」

「うん！ 分かってるよ。私達三人は皆、このゲームが好きなんだよ」

ツバキはお手本のような綺麗な笑みを浮かべて語った。

俺はその顔をじっと見つめていたことに気がついた。

「ツバキさんって絶対モテるだろ」

「え？ ええ！？ そ、そんな事ないよ！」

ツバキは腕をぶんぶん振りながら否定していた。微かに顔が赤くなっているようにも見えた。可愛いなあ、本当。……これラブコメらしいけどさ、俺いつになったらモテんの！？ 本当にモテんだろうな！？

## 8 ラブコメ!?(後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございます。ありがとうございました！  
描写練習してきます。笑

## お知らせ

本当に申し訳ないのですが……この作品は前話で最終話にさせて頂きます。

理由としては、卒業までにバイトなどを入れることにしたので時間が取れなくなることで、最後にもう一つだけ作品を描きたいと思ったのが大きな原因です。

ちなみに進学なのですが先生に「お前の学力じゃ厳しいから推薦してやる」的な事を言われたので勉強は一時休憩し、大学費用の足しにとバイトを始めることにしました。といつても勉強はあまりしていなかったのですが……。

こんな作者で本当に申し訳ないです……。

最後に書く作品では、この物語の三人のキャラクターの名前を使いたいと思います。この物語が完結できなかったのでせめて、名前だけでも忘れないように使いたいと思います。ちなみに、リコは似たような雰囲気にする予定ですが、リクとツバキは性格が違います。リクとツバキは次の作品では『陸』『椿』と表記します。

もし良ければ一度読んで頂けると作者自身、本当に本当に嬉しいです。

お気に入り登録をして頂いた方には裏切ってしまったような形になつてしまい本当に申し訳ない気持ちです。

次の作品を読んでくださって「これを続けるならこの件をキャラにしてやるかな」と思ってくださいれば嬉しい限りです。

一人でも多く、お気に入り登録をされている方が新しく気に入っ

てもらえるような作品にできればな。と思っております。

<http://ncode.syosetu.com/n5806t/>

は新しい小説です。是非読んでやってくださいませ。

また、連載しててアイデアが出てこない時などには空いた時間で短編など投稿できればな。と思っております。

この作品を空いた時間に新しく投稿する。ということはありません。

では最後になりましたが皆様今まで読んでくださりまして本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1043t/>

---

Happy dreamへダイブ！

2011年5月29日03時40分発行